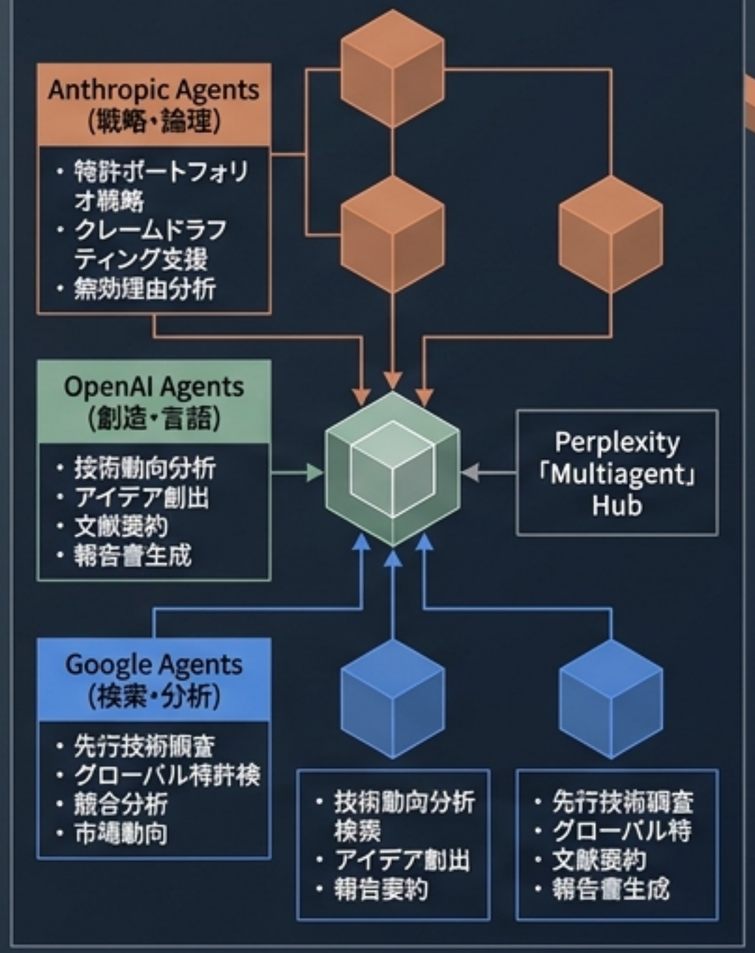
Perplexity「Multiagent」の知財業務への戦略的実装

最大16エージェント・異種混成チームの実像と、実務における「使いどころ」と「境界線」

異種混成チームの構成と役割



実務における「使いどころ」と「境界線」

ユースケース	エージェントの適合性			境界線と留意点
	▲	■	●	
先行技術調査	▲	■	●	高度な判断は弁理士の確認必須
無効資料調査	▲	■	●	法的リスクの最終評価は人間が担当
クレームドラフティング	▲	■	●	法的リスクの最終評価は人間が担当
FTO調査	▲	■	●	高度な判断は弁理士の確認必須
IP戦略立案	▲	■	●	法的リスクの最終評価は人間が担当

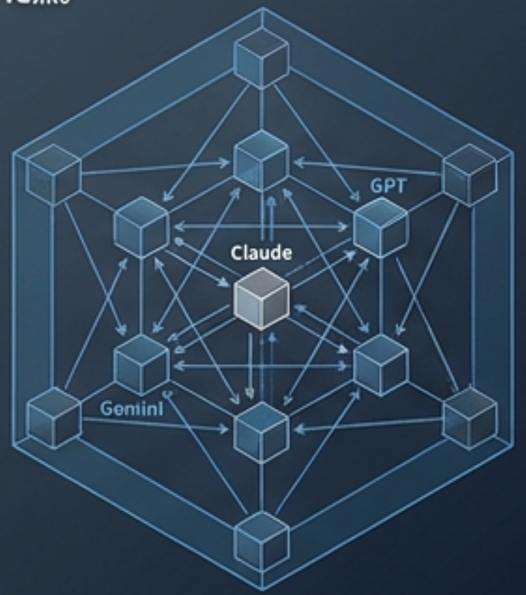
検証情報	
検証基準日	2026年11月19日
ベースモデル	Claude Fable 5.2
対象読者	知財部門責任者 / 弁理士 / R&D戦略担当

Gemini Notebook

The Fact（事実）

最大16体の異種混成エージェント

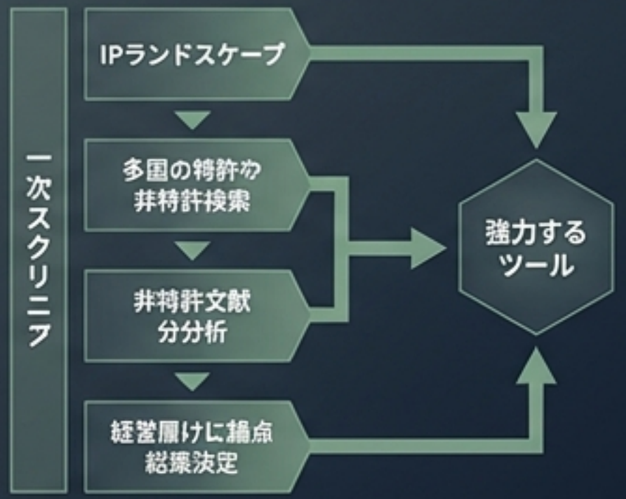
Claude（Fable/Opus）、GPT、Geminiの各モデルが並行稼働。最大の特徴は、エージェント同士が直接根拠を共有し、相互に検証・疑問出しを行う「直接対話型ネットワーク」に移行した点。



The Value（価値）

多言語・多観点の一次スクリーニング

IPランドスケープの下調べ、各国の特許・非特許文献の並行探索、経営層向け論点整理において、既存ツールを凌駕する強力な武器となる。



The Risk（リスク）

法的・機密リスクと網羅性の欠如

情報漏洩リスク（3社以上へのデータフロー）に加え、網羅性・再現性の証明不可。弁理士法第75条（鑑定業務）抵触リスクのため、無効資料調査の最終判断や出願書類作成への適用は厳禁。



Gemini Notebook

ハイプ（世間の認識）vs. 検証された事実

誤解（世間の認識）	事実（検証された事実）
誤解：「16種類の異なるAIモデルが別々に動く」	事実：「最大16体のエージェントが、主に3系統(Claude/GPT/Gemini)のフロンティアモデルに分かれて動く」。16種のモデルが混在するわけではない。
誤解：「月額料金内でコストを気にせず使い放題である」	事実：「1タスクのクレジット消費が極めて大きい（公式も『最重要タスクのみ』を推奨）」。具体的な消費量は現時点で非公表であり、不透明。
誤解：「公式の『Perplexity Patents』を完璧に使いこなす」	事実：「Multiagent内からのPatents呼び出し可否、および特許DBの収録範囲（日本国特許庁の包含など）は現時点で未確定」。

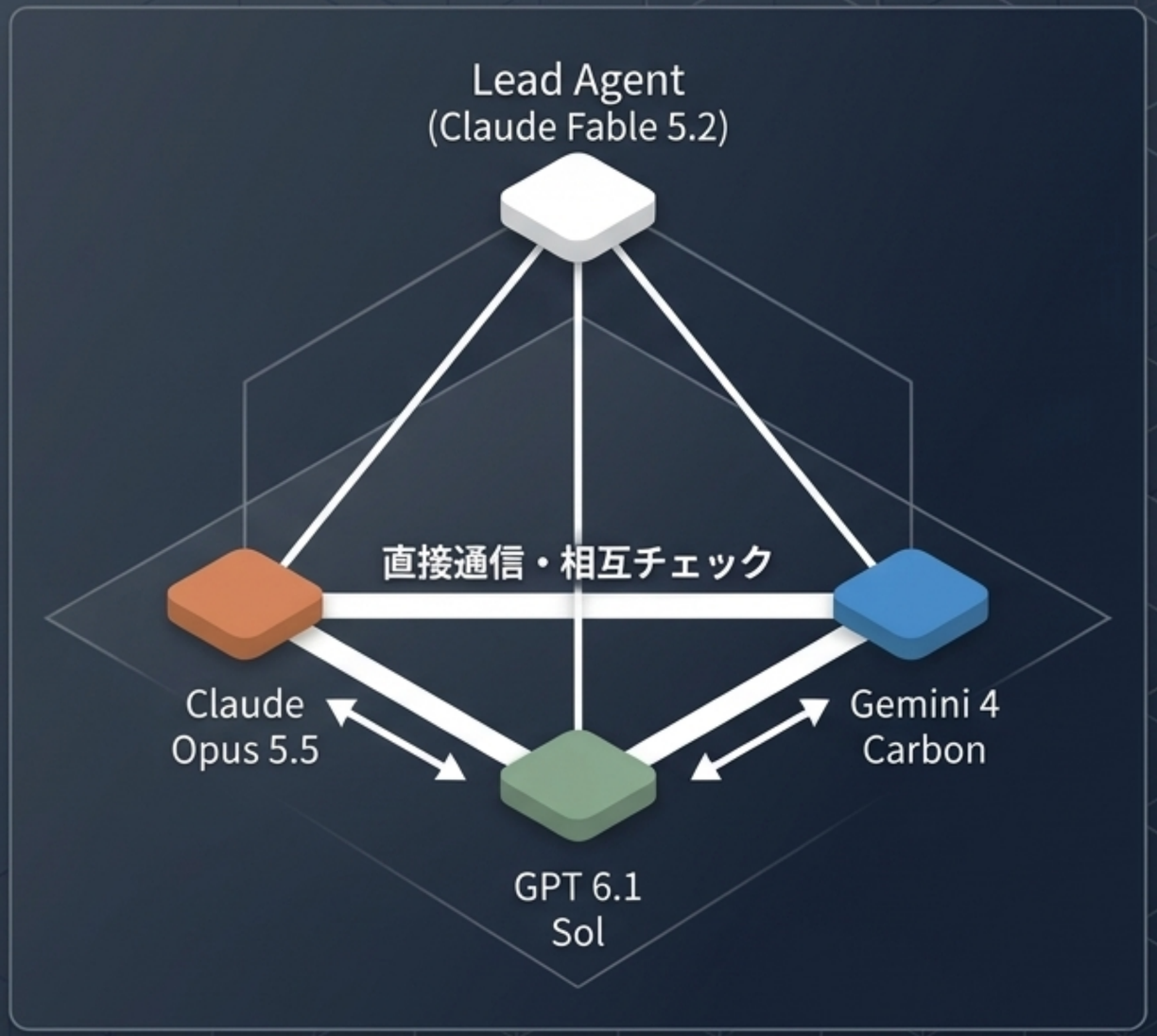
Gemini Notebook

Multiagentの心臓部：相互監視型アーキテクチャ

旧来のUltraモデル（ハブ＆スポーク型）からの根本的な進化は「エージェント間の直接通信」です。

ユーザーが依頼を行うのはLead Agentのみ。Lead Agentが計画を立案し、最大16体（自身含む）にタスクを分割・割り振ります。

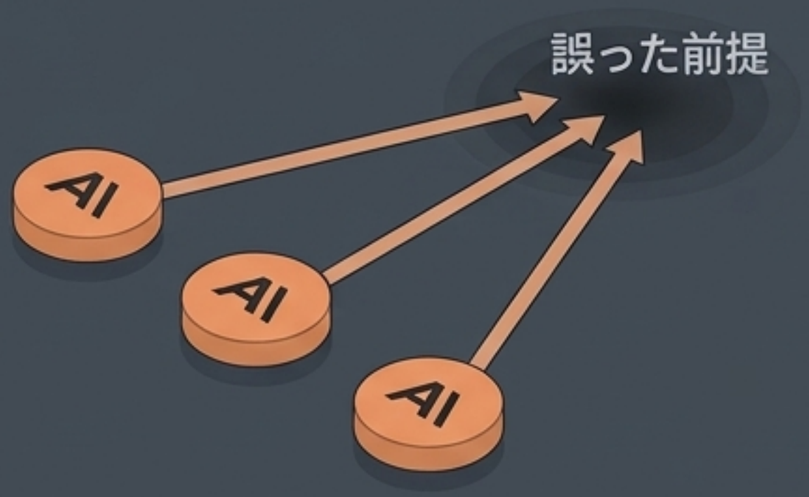
各エージェントは独立して動くだけでなく、共有ファイルを連携編集し、「他者の根拠の利用」「前提への疑問出し」「食い違いの追加調査」を自律的に行います。



Gemini Notebook

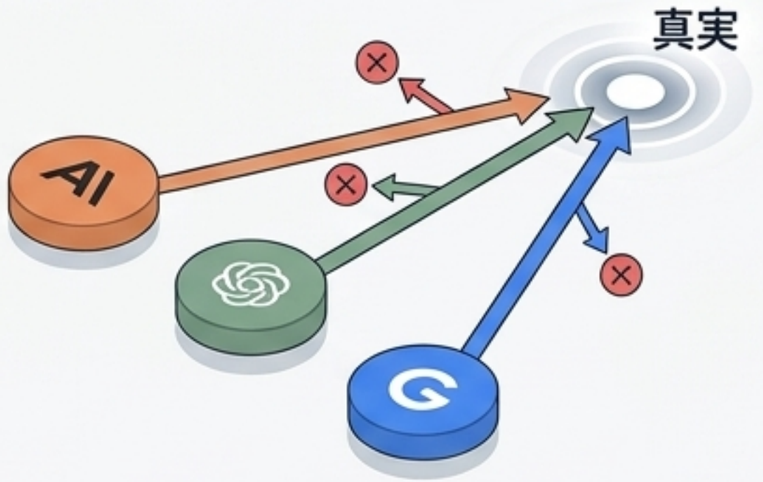
異種混成（Mixed-Model）がもたらす相互検証の優位性

単一モデルチームの限界



同じ系統のAIモデルは、同じ「幻覚（ハルシネーション）」や「論理の飛躍」に対して同調しやすい性質を持つ。誤った前提がそのまま肯定されてしまうリスク（エコーチェンバー現象）。

異種混成チームのブレイクスルー



開発元が異なるフロンティアモデルを1チームに混在させることで、別々のバイアスと学習背景を持つAIが互いの論理をクロスチェックする。事実、ベンダーの自己報告（WANDR, Terminal-Bench 4.1）によれば、混成チームは「同一モデル4体」よりも高い精度と速度を安価に記録。知財特有の複雑な論理展開におけるミスを自律的に減らす可能性（理論的妥当性）を秘めている。

Gemini Notebook

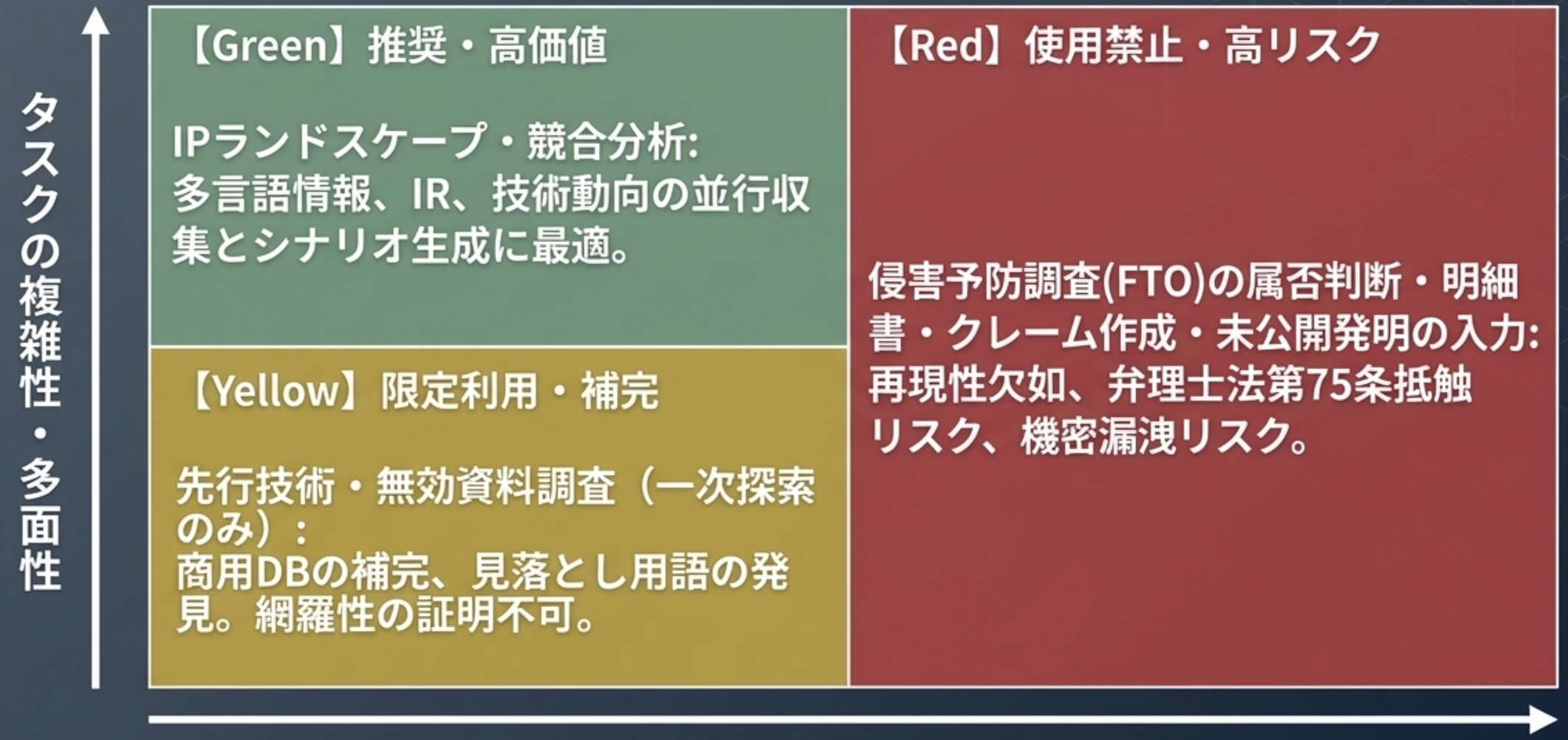
並行・マルチエージェント機能の競合比較マトリクス

	ツール	モデル多様性	通信方式	知財適性の特徴
1	Perplexity Multiagent	異種混成(Claude/GPT/Gemini)	直接・相互検証	多ベンダーによる相互検証が強み。コスト不透明。
2	Anthropic Agent teams	単一(Claude)	直接	社内データ連携やファイル処理に強み。
3	Manus Wide Research	非公開	独立	「100社の出願動向」など同種タスクの大量並列に向く。
4	Kimi Agent Swarm	単一(Kimi)	報告型	大規模探索

結論: Perplexityの真の差別化要因は「数」ではなく「異種混成による相互監視」である。

Gemini Notebook

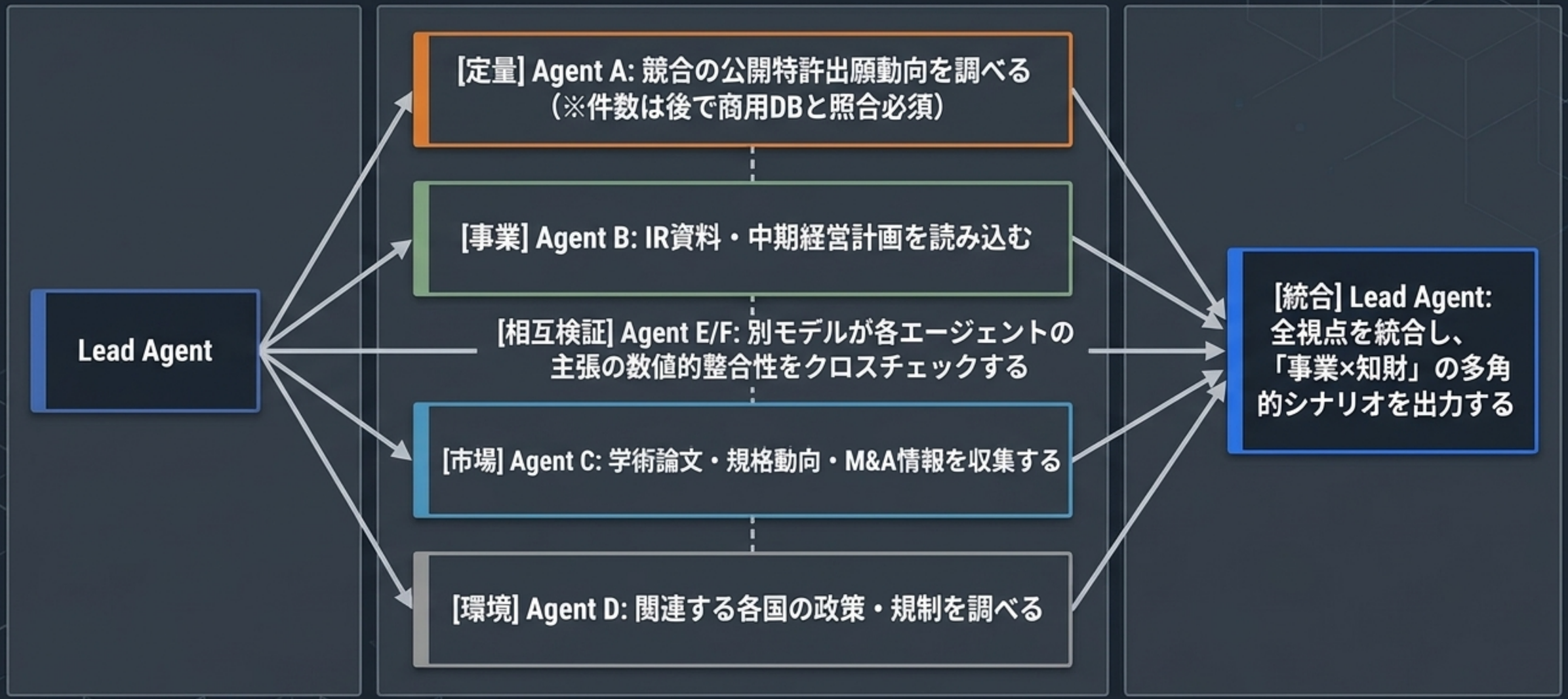
知財業務への適用可否マトリクス（IP Task Suitability Map）



Gemini Notebook

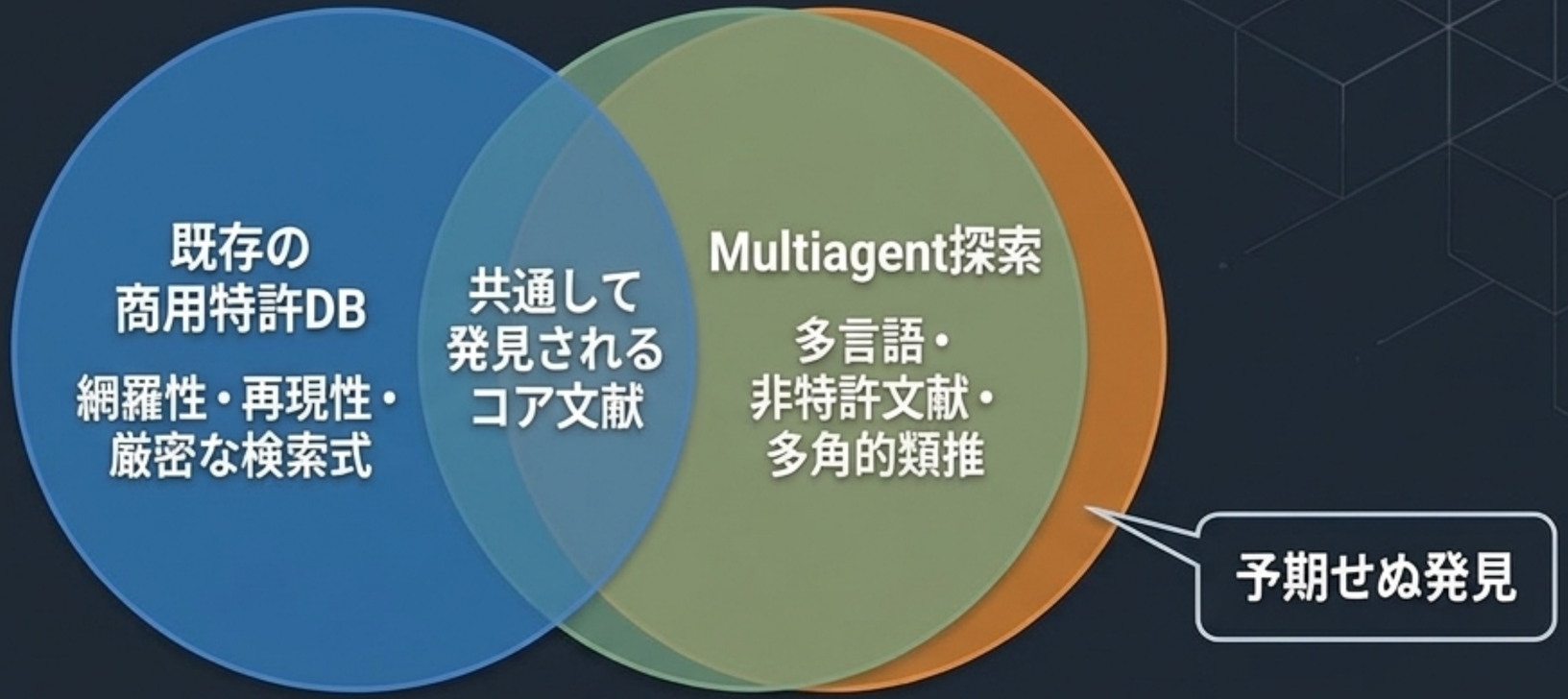
Deep Dive: IPランドスケープ調査における理想的ユースケース

Multiagentの設計思想に最も合致する「分業と統合」のプロセス



Gemini Notebook

Deep Dive: 先行技術調査における「別系統の網」としての価値



【限界（Red Flag）】

- 検索式の再現性がなく、実行のたびに結果が変わる。
- 特許DBの収録範囲が不明（JPO含むか等）であり、網羅性の証明に使えない。

【価値（Green Light）】

- 「見落としていた用語」や「異分野の概念」の偶発的発見。
- 日・英・中・韓の特許庁データや論文・GitHub等の非特許文献の並行探索。

結論：正式な調査の根拠ではなく、調査設計時の「仮説生成」と「別系統のクロスチェック網」として使う。

Gemini Notebook

ガバナンスの壁：Legal, Compliance & Privacy Risks



1. 情報機密性（未公開発明の入力禁止）

Multiagentは構造上、Anthropic、OpenAI、Googleなど3社以上のモデルへデータが流れる。サブプロセッサー管理や監査ログの追跡が単一ベンダーより複雑化するため、出願前の未公開発明や契約書原文の入力は原則禁止。



2. 弁理士法第75条（専権業務）への抵触リスク

AI利用であっても、無資格者が報酬を得て明細書・クレームの作成や特許の属否判断（鑑定）を実質的に行えば、法違反となる（日本弁理士会 令和7年4月見解）。調査会社が鑑定的な成果物を提供する場合も極めてハイリスク。



3. ハルシネーションの連鎖

存在しない特許番号や判例の生成リスク。相互チェック機能があっても、誤った前提が「共有ファイル」を通じて別エージェントに伝播する危険性がある。
全件の原典照合（特許番号・公開日・判例）が絶対条件。

Gemini Notebook

業務利用の絶対条件：「Enterprise Max」の導入

機能・要件	Free/Pro/Max（個人）	Enterprise Max（法人）
AI学習への不使用	オプトアウト必要	不使用明記（第三者含む）
データ保持期間	不透明	設定可能（ゼロ保持追求）
監査ログの提供	なし	詳細なログ提供

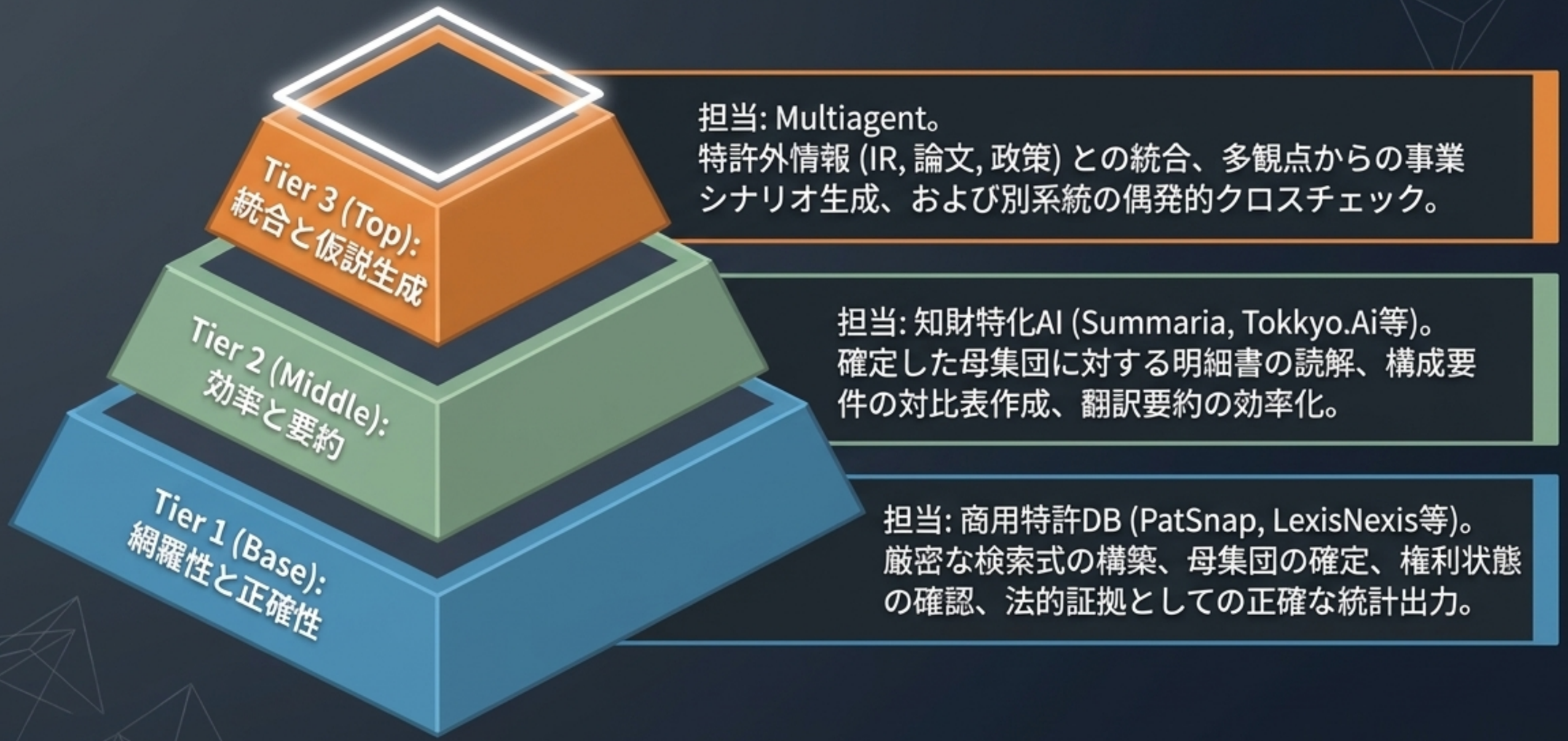
コスト管理の現実（The Cost Reality）

Multiagentは1タスクあたりのクレジット消費量が非公開。通常のComputer機能でも長文タスクで数万クレジットを消費したケースが報告されている。
公式の推奨通り「重要な意思決定・高密度の問題解決 (Forecasting等) 」に用途を絞り、月次のクレジット上限を情シス部門と連携してモニタリングする運用が不可欠。

Gemini Notebook

The Synthesis: 知財調査の三層構造（3-Tier Architecture）

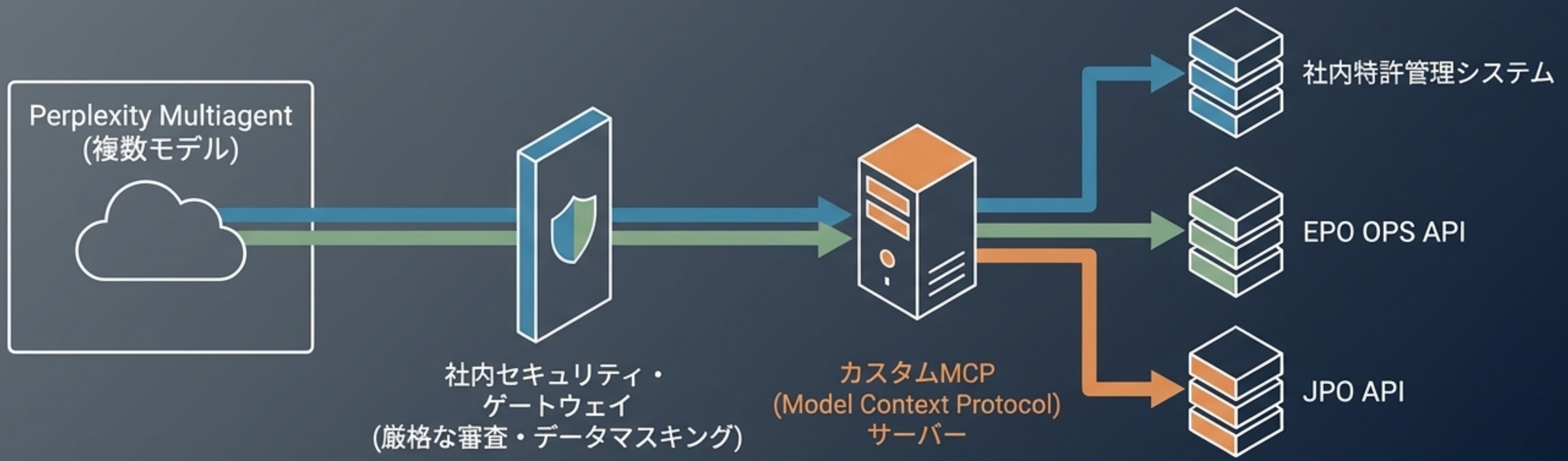
Multiagentは既存ツールを駆逐するものではなく、最上位レイヤーに位置づけられる。



Gemini Notebook

Technical Extension: MCPによる特許データベースの拡張

Multiagent最大の弱点である「特許収録範囲の不透明さ」を克服する技術的アプローチ。



PerplexityはMCPに対応（2026年3月～）しており、任意のMCPサーバーを接続可能。公式APIや社内システムを直接呼び出すカスタムコネクタを構築することで、正確な特許データに基づく相互検証が可能になる。ただし、データフローが複数モデルへ拡散するため、情シス部門の承認が前提となる。

Gemini Notebook

Implementation Playbook: 導入への5つのチェックリスト

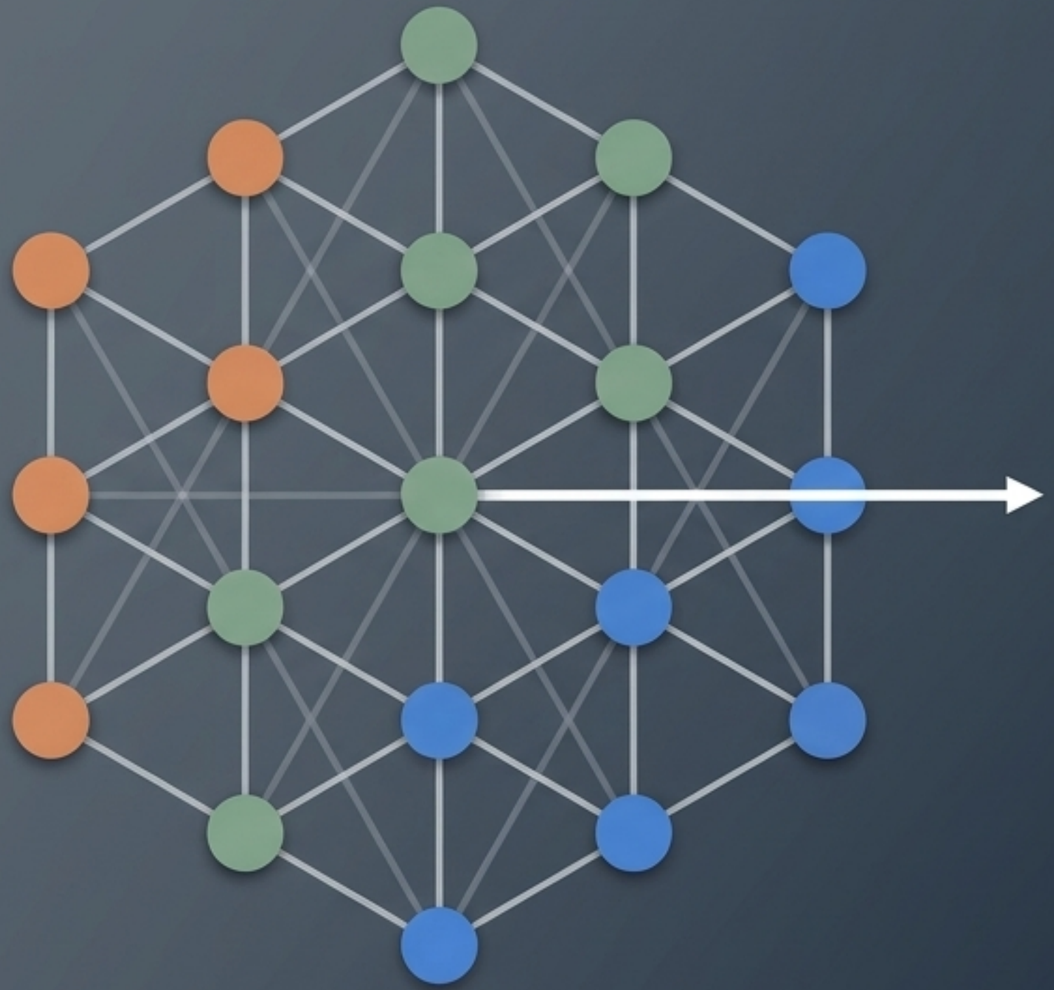
実務への安全な実装に向けた、知財部門のアクションプラン。

- ☐ 【契約】契約形態の確認：「Enterprise Max」の調達とAI学習オフ・データ保持期間の設定完了。
- ☐ 【ルール】入力禁止情報の策定：未公開発明、契約書原文、顧客情報など「入れてはいけない情報」のガイドライン化。
- ☐ 【PoC】「公開情報のみ」でのトライアル実施：まずは過去に結論が出ている無効資料調査の「再現テスト」や審査基準比較で精度を検証。
- ☐ 【運用】全件原典照合の徹底：出力された特許番号、公開日、判例に対し、必ず一次情報（J-PlatPat等）で事実確認を行うフローの構築。
- ☐ 【管理】クレジット消費のモニタリング：情シス部門と連携し、高コストなMultiagentの月次利用枠とROIを可視化する。



Gemini Notebook

Conclusion: 次世代知財戦略におけるMultiagentの真価



「調査の下準備を担う、優秀なアナリスト数名分」

Multiagentは、多言語・多視点での情報収集とシナリオ生成において極めて高い価値を持ちます。しかし、それは既存の商用データベースの網羅性や、弁理士・専門家による「最終的な鑑定」を置き換えるものではありません。

その強み（異種混成によるクロスチェック）と弱み（法的厳密性・機密性リスク）を正確に理解し、適切なガバナンスの下で「三層構造の最上位レイヤー」として活用する企業こそが、複雑化する次世代の知財・事業戦略をリードしていくでしょう。

Gemini Notebook